

## 上野殿御返事

抑も今の時、法華經を信ずる人あり。或は火のごとく信ずる人もあり。或は水のごとく信ずる人もあり。聴聞する時はもへたつばかりをもへども、とをざかりぬればすつる心あり。水のごとくと申すはいつもたいせず信ずるなり。此はいかなる時もつねはたいせずとわせ給へば、水のごとく信ぜさせ給へるか。たうとしたうとし。

(一一〇六頁)

六月度の御講に当たりまして只今は皆様方と共に読経・唱題申し上げまして御報恩申し上げた次第であります。

本抄は建治四年（一二八七年）二月二十五日、御年五十七歳の時、南条時光殿の御供養に対して書かれた御返事であります。御真筆は現存していません。

当時の世間は、前年が旱魃で飢饉がひどく、しかも秋以来、疫病が流行していたのであります。

そうした厳しい状況の折、南条时光は日蓮大聖人の身延での御生活をしのび、御供養の品々を送ってきたのであります。苦難の中でも変わらぬ信心に励む時光に対して、信仰の姿勢について、いかなる時も変わらないこの時光の真心と信心の姿勢を讃えられて、法華經を信仰する人の中には「火のごとく信ずる人」と「水のごとく信ずる人」の二つの姿勢があることを御教示なされ、水の流れるような信心こそ大切であり尊いことを御教示なされているのです。

火のごとき信心とは、御講聞書（一八五六頁）には「火の如しとは、此の經のいわれを聞きて火炎のもえ立つが如く、貴く殊勝に思ひて信ずれ共、聽て消え失ふ。此は当座は大信心と見えたれ共、其の信心の灯消ゆる事やすし。」と仰せの如く、法門を聞いた時は感激し、薪を得た火が燃え立つように信心に励みますが、時がたつと消えるように信心がなくなってしまうことです。それは、内から湧き上がる「内発」の力ではなく、外からの刺激で動かされる「外発」だからです。ゆえに、薪がなくなると燃え尽きたり、他の縁に紛動されてしまい、「すつる心」が生じてしまうのです。

例えば、同じ法華講員の中にも、入信後しばらくは勤行・唱題、折伏を熱心に行っても、いつの間にか信心の歩みを止め、やがて退転してしまう事があります。このような信心では自他の成仏は叶いません。

一方、水のごとき信心とは、内から湧き上がる求道心を持ち、いかなる縁にも紛動され

ず、不断の前進、持続を貫いていくことです。

拝読の御文に「水のごくと申すはいつもたいせぜ信ずるなり」と仰せられており、『御講聞書』（一八五六頁）には「水は昼夜不退に流るゝなり。少しもやむ事なし」と示されるように、滔々たうとうと流れる川のように、少しも止まることのない不退転の信心のことです。私達も、大聖人からお褒めいただけるよう、御本尊を固く信じ、怠りなく自行化他の信心を積み重ねていくことが大切です。

御講聞書（一八五六頁）には「水の如きの行者と申すは、水は昼夜不退に流るゝなり。少しもやむ事なし。其の如く法華経を信ずるを水の行者とは云うなり。」と説かれていいます。

しかし、実際に一人立ち、「水の信心」を貫く「水の行者」として戦い続けることは、決して容易ではありません。「総じて此の経を信じ奉る人に水火の不同有り。其の故は火の如きの行者は多く、水の如き行者は希なり。」とも仰せです。

そこで大事になるのが「善知識」です。善き先輩、同志の存在です。共に大聖人様の教えを学び合って、御法主日如上人猥下の御指南を拝して信心の原点を常に思い起こし、日々広布の活動の中で深めていく仲間が、何よりも大切です。

★大聖人はまた、「此はいかなる時もつねはたいせぜとわせ給へば水のごとく信ぜさせ給へるか」と述べられているように、どんな時でも、変わらず大聖人の教えを求め抜く南条時光の不退の信心を讃えられているお言葉であります。

燃え上がる信心の情熱を持ち、水の流れるように持続する「信心」こそ理想的な姿といえるのです。広宣流布の大誓願に生き抜く大情熱を、私たちは生涯。堅持し続けてまいりたいものです。そうでなければ、結局は信心の前進を阻もうとする魔に食い破られてしまうからです。

法華経の行者に対しては、必ず「三障四魔」や「三類の強敵」が襲い掛かってきます。こうした障魔や難に対して、大聖人は決して恐れてはならない。退いてはならないと、繰り返し強調されているのであります。開目抄には「つたなき者のならひは、約束せし事を、まことの時はわするゝなるべし」（五七四頁）とあります。

また、「月々日々につより給へ。すこしもたゆむ心あらば魔たよりをうべし」（一三九七頁）ともあり、また、四条金吾殿御返事（七七五頁）には「此の経をきうくる人は多し。まことに聞き受くる如くに大難来たれども『憶持不忘』の人は希なるなり。受くるはやすく、持つはかたし。さる間成仏は持つにあり。」とも仰せです。

信心は瞬間瞬間が魔との闘争です。この障魔を打ち破り、昨日より今日、今日より明日

へと、求道心ぐどうしんを燃やして、成長し、向上しゆく一人一人であつていただきたいのです。最後の段では、一族に病氣の人が出たことを心配なされて、病は十羅刹女が信心の強弱を見ているのであるから、なお一層、強盛な信心を貫いていくように励まされています。ところで、鬼神には、善鬼と悪鬼の二種類があり、その働きについて日如御前御返事（一三二頁）には「善鬼ぜんきは法華經の怨あだを食す・悪鬼あくきは法華經の行者まじゅうじやを食す」とあります。「食す」とは、妨害したり、力を弱めたりして、生命力を奪うという意味です。

天台大師は病が起こる原因を六つ挙げていますが、その第四に、「鬼便きたよりを得る」とあります。しかし、いま一家をなやませているのは鬼神によるものではないだろうと言われているのであります。鬼神が法華經を實踐する者を悩ますならば、それは仏（釈尊）に敵対することになり、最後は自分を滅ぼしてしまうからです。

一方、十羅刹女は、法華經陀羅尼品第二十六で、法華經受持の者を守護することを釈尊に誓っています。故に、現在南条家に起きている病氣は、法華經の行者を守護する十羅刹女の働きによるものであり、それは信心の強さを試みみるためであろうと仰せなのです。

兄弟抄（九八二頁）にも、こう仰せです。「此度このたびこそまことの御信用はあらわれて、法華經の十羅刹も守護せさせ給ふべきにて候らめ。雪山童子の前に現ぜし羅刹らせつは帝釈たいしゃくなり、尸毘王しひおうのとは毘沙門天びしゃもんてんぞかし。十羅刹心じゅうらせつしんみ給はんがために父母ふもの身に入らせ給ひてせめ給ふこともやあるらん。それにつけても心こころあさからん事は後悔こうかいあるべし」とあります。法華經の行者を守護する十羅刹女が、私たちの信心を試すことがあります。これは、私たちにとって重要な原理です。

諸天の守護といつても、自身の信心を深めず、受け身になって、何か漠然と加護を待つということではありません。「必ず心の固かたきに仮よって神の守り則すなわち強つよし」（一二九二頁）です。病氣や宿命など困難に直面した時に強盛な信心で立ち上がることで、諸天善神の守護の働きがさらに強くなるのです。

そして、結むすびに「釈迦しやくか仏・法華經の御そら事の候へきかと、ふかくをぼしめし候へ」と仰せのように、釈迦しやくか仏、法華經に虚妄こもつはあるはずがないと、深く信じていきなさい。どこまでも、御本尊を無二の心で信じ切っていくことが大切です。この病には深い意味がある故、強く御本尊を信じていくなら必ず病も乗り越えていけるとの大聖人の御指南なのです。私達は、重要な場面や頑張りどころ、とりわけ折伏に当たっては、積極果敢な行動を取るべきです。

大聖人が「力あらば威勢を以て謗法をくだき、又法門を以ても邪義を責めよとなり」（聖愚問答抄・御書四〇三頁）と仰せの折伏の姿は、まさにこのことです。また、講中で「今

こそ折伏の時” “本年こそ誓願目標を達成しよう” などの声を掛け合い、折伏に動こうと  
しているときに、”折伏は機会を見て、私はいつも通り”との姿勢では、異体同心の和を  
築くことができません。

私達は、勤行唱題を欠かさない、絶対に謗法を犯さない、という常恒不断の信行を心掛  
けて自らを磨き、しかるべきときには命を躍動させ、岩をも砕く情熱をもって折伏行に挑  
戦してまいります。日如上人猥下は

「唱題こそ、一切の仏、一切の法、一切の菩薩をはじめ九法界の衆生など、一切衆生の心  
中の仏性を「唯一音」によって喚び顕す、計り知れない功德を存しており、その仏性喚起  
の功德はまことに大きく無量無辺であります。よって、この廣大無辺なる功德と歡喜をも  
って折伏を行ずれば、折伏に当たって必要なあらゆる力が具わり、いかなる困難も障害も  
乗り越え、誓願を達成することができます。」（大日蓮・令和六年五月号）と此  
のように御指南になってます。

私達は、本年後半に向けて、御本尊に対する絶対の信仰心を基に、真剣に勤行唱題を重  
ね、講習会登山に積極的に参加して教学研鑽にも大いに努めましょう。そして化他の実践  
として”私達の手で広宣流布を”との情熱をもって折伏戦を展開していくこと。これこそ、  
私達が進むべき成仏への直道と捉え、共に力強く前進してまいります。以上。

（令和六年六月度・御講の砌）